



©Florian Hammerich



©Kiyotaka Saito

第221回定期演奏会 究極のベートーヴェン

2026年11月7日(土) 13:45開場 14:30開演

指揮/阪哲朗 ピアノ/仲道郁代*

ベートーヴェン プログラム

・ピアノ協奏曲第5番変ホ長調Op.73「皇帝」*

・交響曲第5番ハ短調Op.67「運命」

サクソフォン界の新時代を切り拓く俊才・上野耕平さんをお迎えしての心沸き立つ協奏曲や、森と湖の国・フィンランドが生んだ巨匠、シベリウスの美しい交響曲をお愉しみいただいている本日の定期……に続きまして、次回定期(11月7日)も、素晴らしいゲストをお迎えしての公演となります。

《究極のベートーヴェン》と題した次回定期、まず前半では、日本を代表する人気ピアニストのひとりとして充実をいよいよ深める名匠・仲道郁代さんが独奏をつとめ、スケール大きな傑作・ピアノ協奏曲第5番《皇帝》をお愉しみいただきます。そして後半では、いつの時代も人気のトップを誇る交響曲第5番(《運命》のニックネームで有名ですね)をご堪能いただきます。

仲道さんといえば、幅広いレパートリーをお持ちの中でも、特にベートーヴェンに関しては思い入れも深く錬磨を重ねられています。ピアノ・ソナタの全曲録音やピアノ協奏曲の全曲録音(パーヴォ・ヤルヴィ指揮ドイツ・カンマーフィルハーモニー・ブレメンとの共演)も完成、いずれも素晴らしく豊かな音楽が満ちる銘盤ですし、来年のベートーヴェン没後200年に向けて、10年がかりで展開している《仲道郁代 The Road to 2027|サイタル・シリーズ》では、ベートーヴェンを核としたプログラムも組み込んで、ますますの深化を磨き込んでいくところ。その献身と渾身とを、逃さずに体験していただきたいものです。

この必聴プログラムの指揮にお迎えするのは、ドイツ各地の歌劇場でも音楽総監督などを歴任し、その豊かな才能を日本の音楽界でも響かせる阪哲朗さん(びわ湖ホール芸術監督、山形交響楽団常任指揮者)。しなやかで的確雄弁な指揮から溢れる歌心、オーケストラから引き出す音楽の豊かな生命力……と共演する音楽家たちからの信頼もあついマエストロです。既に山形響でもベートーヴェンの交響曲全曲演奏会を完遂させておられますし(阪さんのWebページでは、交響曲第5番の全曲動画も閲覧できます)、ウィーンで学びドイツで活躍してこれたマエストロが、今あらためてセントラル愛知響と追究するベートーヴェンの真髄……楽団にとっても貴重な機会となるはずです。お聴き逃しなく!

◆このように扉を叩いた……かどうかは謎ですが——《運命》の由来

ドイツの作曲家ルートヴィヒ・ヴァン・ベートーヴェン(1770~1827)は、生涯に9つの傑作交響曲を書いています、その9作の中にはタイトルや通称がついている作品もあります。たとえば第3番は《英雄》、第6番は《田園》、そして最後の第9番は《合唱つき》。

ところが、第5番につけられた《運命》というニックネーム……これはベートーヴェンご本人のつけた正式なタイトルではありません。秘書役を務めていたシンドラーという人が書いた本にいわく、この曲の冒頭(「(ん)ジャジャジャ・ジャー!」というあれです)は何を表しているのですか?と作曲家に尋ねたところ、「このように運命は扉を叩くのだ」という答えが返ってきた……という話で、そこから《運命》と呼ばれるようになったとか。

なるほど、言われてみるとそう聴こえるから上手い話なのですけど、実はこのシンドラーという人、ベートーヴェンの資料を作曲家の没後、自分に都合良く勝手に書きかえていたことが後に判明しておりまして、彼の証言はどうも信頼がおけないのが困ったところ。《運命》の逸話も真偽不明で、聴くときには意識なくても良いのではと思いますが、それにしても曲想をうまく捉えた話ではあります。

なにしろ、第1楽章の冒頭でいきなり鳴り響く例のテーマ、音符の数はたった4つなのに、一撃で印象に刻まれるインパクトを持っています。これが楽章を通して何度も執拗なまでに繰り返され、聴き手の感情に刻み込まれてゆきますから、なるほど《運命》。そればかりか、この《運命の動機》は続く3つの楽章にも用いられ、全曲に見事な統一感をもたらしているのですから、まさに天才のわざ、と言うほかありません。

◆何百回演奏しても新しい発見がある——不滅の〈第5番〉

ところで、全曲を通して、とてもシリアスな《運命》ですが、まったく対照的な音楽に思える交響曲第6番《田園》とはほぼ同時期に着想され、ほとんどセット作品のように生まれているのです。凄まじい緊張感と昂揚に満ちた《運命》と、のどかな喜びをしみじみ味わい愉しむような《田園》(途中に嵐の光景も挿入されて緊張はしますけれど、それも音風景の一部として愉しめる作品です)、まるで性格の異なる双子のような2作なのも面白いところ。2作とも同じ演奏会で世界初演されたところまでセットなのです(1808年12月22日、ベートーヴェン指揮)。

また、《運命》に組み込まれている、偉大な先人・モーツァルトからの影響——第3楽章冒頭のテーマは、モーツァルトの交響曲第40番終楽章の主題とよく似ていたり、第4楽章にはモーツァルトの交響曲第41番《ジュピター》緩徐楽章のメロディが変形されたような音型が出てきたり……など、本作をめぐる語りべきことはまだまだたくさん。ご興味あるかたは、平野昭／土田英三郎／西原稔編『ベートーヴェン事典』[東京書籍、1999年]や、最新研究の成果紹介も詳しい(3分冊、1300ページ超!の大作)大崎滋雄『ベートーヴェン像再構築』[春秋社、2018年]に詳しいので、ぜひ。

◆《皇帝》たる存在感と、その気品も溢れる美しい内実と——ピアノ協奏曲第5番

そして《皇帝》。ベートーヴェンのピアノ協奏曲第5番(1809年作曲)には、こんな愛称がつけられています(作曲家自身の命名ではありません)。

《運命》と《田園》と一緒に初演された1808年のコンサート(ここではピアノ協奏曲第4番も初演されていました)の直後から、ベートーヴェンは新しいピアノ協奏曲——5番目にして最後のコンチェルトにとりかかっているのですが、この頃、彼が住んでいた楽都ウィーンは、とんでもない状況にありました。ナポレオン率いるフランス軍がウィーンに攻め込み、音楽どころではなくなっていたのです。

かつて、フランス革命の理念に深く共鳴したベートーヴェンは、交響曲第3番(1803～04年)に《ボナパルト》と題したのですが(当時、貴族政治に対抗していたナポレオン・ボナパルトの姓を冠したわけです)、ナポレオンが皇帝に即位したという知らせをきいて激怒。タイトルを抹消して《英雄交響曲——ある英雄の思い出に》と書き直した……という逸話もあります。そのナポレオンが今や、ウィーンを脅かす軍隊を率いているのですから、皮肉なものです。

そんな中で仕上げられたピアノ協奏曲第5番に《皇帝》という愛称がついているのも、考えてみればおかしい話ですけど、これは作品が持つ威風堂々たる印象からつけられたもの。なるほど、曲想は美しく気品に溢れながらも雄渾で壮大。悪くないニックネームだとは思いますが、《皇帝》イメージを忘れたうえで聴きになってみると、また違った音風景が見えてくるはずですよ。

また、この曲は現代の楽器で演奏すると、ピアノとオーケストラが拮抗しながら堂々たる丁々発止を繰り広げ……というイメージにもなりますが、作曲された当時のピアノは、まだ今ほどしっかり響くものではありませんでした。オーケストラと対抗するには音量も足りませんでしたから、《皇帝》の楽譜をよく見ると、ピアノ独奏がオーケストラの総奏にかき消されないように、ちゃんとバランスに気を使って書かれているのも分かります(このあたり、小岩信治『ピアノ協奏曲の誕生 19世紀ヴィルトゥオーゾ音楽史』[春秋社、2012年]をぜひ)。

こういった歴史的な背景も含めて、次回定期でお迎えする名匠・仲道郁代さんは深く研究し尽くしてこられたピアニストですから、作品に寄せる深い愛情と知見とが昇華した、素晴らしい音楽をオーケストラと共有してくださるはずですよ。ぜひ、次回もこのホールで一緒に体感いたしましょう!

やま の たけひろ 山野雄大

ライター[音楽・舞踊評論]。『レコード芸術 ONLINE』『バンドジャーナル』『音楽の友』など雑誌・新聞への寄稿をはじめ、NHK・FM「オペラ・ファンタスティカ」他ラジオ出演も。第一生命ホールでのコンサートシリーズ《雄大と行く 昼の音楽さんぽ》ナビゲーターほか、CDや公演の解説、朝日カルチャーセンターでの音楽講座、歌詞対訳など多数。レイディエート・フィル正指揮者ほかアマチュア・オーケストラの指揮も。

Profile

